

は通稱喜兵衛。勝木氏家の門下から出た。その子孫喜兵衛氏長・六郎氏次・覺兵衛氏清・覺之丞氏賢・三郎氏宗・權之丞氏吉・八郎兵衛氏平を経て、圓七氏次に至り白銀師になつた。又覺之丞氏賢の二子に吉郎兵衛氏安があり、更に同名二代を経て、權吉氏安に至りその子も同名であつた。初代權吉氏安の弟氏春は富山侯に仕へ、若林氏を冒し、その弟に吉郎兵衛氏廣があつた。

カツキウチ 勝木氏 鏡象眼師。勝木盛定通稱與三右衛門は、承應の頃京都より下つて金澤に住し、祿五十石を賜はつた。その後更に同名二代相承け、四代勘右衛門後に半次郎盛定は名工と稱せられ、富山侯に仕へた。

カツキウチ 勝木氏 鏡象眼師。勝木盛光は通稱八兵衛・勝木與三右衛門盛定に技を學んだ。子孫惣左衛門守良・源左衛門盛次・伊右衛門盛平・藤左衛門盛國を経て、次代藤左衛門盛國に至り鑄工となつた。

カツキキブン 勝木勤文 七尾の俳人、餘力堂と號した。元祿十三年大野長久と相携へて京に上り、珠洲の海を出した。その序は言水の作る所である。勤文の俳名は、勅文に作られたものと、版本に相準するから種々議論もあるが、餘力堂といふからには、論對の行有餘力二則以學文から探つたので勤文と見るのが正しからう。

カツキコングダウ 勝木權太夫 諱は氏家。前出利長の時下りて象眼細工を初め、祿五十俵を受け、門下二十八人を養成した。寛永元年藩は權太夫の製作に係る象眼鏡を幕府に進獻したに、將軍家光は吉例の土産として年々

カツクニ 勝國 加賀の刀工。初代勝國は二代陀羅尼家重の子。初銘家重。通稱松戸善三郎。寛文元年伊豫大掾を受領し、藤原氏を橋氏に改め、伊豫大掾多羅尼橋勝國作實文三年八月吉日松戸善三郎など、切つた。同十二年六月八日歿。二代勝國は善助又は善三郎。加州住橋勝國作延寶元年八月日又は貞享四年二月日、加陽金府住陀羅尼橋勝國など、切る。寶永二年九月十二日歿。三代勝國は善助又は善三郎。加州住陀羅尼橋勝國作享保元年八月日など、切り、享保十七年五月八日歿。四代善三郎勝國は加州住橋勝國と切り、寶曆三年五月一日歿。五代善太郎勝國は文化六年十二月十一日歿。六代善太郎勝國は天保九年四月十六日歿。七代勝國は通稱松戸榮七郎。勝國作・加州住勝國・加州住陀羅尼橋勝國などと切り、明治十三年九月二十一日歿した。

カツコウ 學校(加賀藩) (一)學校の位置 一寛政から明治に至るまで繼續した加賀藩の學校は、その文學校を明倫堂といひ、武學校を經武館といふた。この兩學校の位置は三たび變遷してゐる。最初寛政四年創立の時には、今の兼六園の西南部に在つて、こゝはもと老臣横山氏の邸地であつたのを、元祿十年上地した所であつた。然るに前田齊廣の時この附近に世子の新館を起す議があつたので、文政二年二月廿七日學校の授業を停止し、之に隣接する舊奥村氏の邸地(今兼六園の東隅)に移築して、六月六日に開校した。但し世子の新築といふは名義に止り、齊廣が異日の寛政に宛てる爲であつたことは、この年二月廿八日早くも退隱の意ある老臣に告げてゐるにて

が、規模漸く廣大し、移築せられた學校の敷地をも併合する要あるに至つたので、五年三月十二日再び授業を廢して之を仙石町なる本堂形後方に轉せしめ、七月功を竣へ、爾後廢藩の時に至るまで常にこの所に在つた。

(二)學校の創立 學校創立の沿革は、遠く前田綱紀の代に溯らねばならぬ。綱紀は夙に學を好み、河内を海内に聘し、同時に學校を創始する志があつたが、未だ實行するに及ばずして歿した。この事は元祿四年自ら定めた大願十事の中に『先聖殿並學校造營事』と記されたによつて察せられる。その後歴世藩主、皆國事の多端と治世の短少によつて之を顧みるの暇がなく、第十代前田重教も綱紀の志を繼ぐの念あつたが、亦着手するを得なかつた。因つて第十一代前田治脩は、之を成就しようとして、老臣奥村河内守尙寛・横山山城守隆從・前田大炊孝友等に命じて、校舎造營の事に當らしめた所、寛政三年九月工を起し、四年二月に至つて竣り、先に京都から聘せられた老儒新井白蟻は、その學頭を命ぜられた。文學校の大きき十五間に七間、白蟻の書いた明倫堂の額を掲げ、武學校は九間に七間、老臣前田直方の筆に成る經武館の額を掲げた。次いで學制略備り、教育の基礎初めて定まつたから、治脩は閏二月六日親書を公にして學校を開設した理由を述べ、尙寛もその意を敷衍して士民一般に布達した。

(三)學校の開始 明倫堂及び經武館開始の典は、寛政四年三月二日を以て舉行せられた。この日頭新井白蟻は孝經を講じ、前田治脩席に臨み、臣僚と共に之を聽き、以て士民を

學頭新井白蟻の外、助教に長谷川準左衛門・新井升平・助教に澁谷潛藏・中島半助・林慶助・講師に宮井柳之助・湯淺半助・稻垣左兵衛・天文學に本保十太夫、歌學に野尻次郎左衛門、算學に村松金太夫等があつた。然るに五月白蟻は病死したから、長谷川準左衛門を以て都講とし、六月明倫堂及び經武館の規則を制して校内に掲示し、七月二日授業を開始した。此の時明倫堂の職員は總裁(又は學校方御用主付)・學校頭(又は學校方御用)・學頭(又は都講)・助教・講師、及び學學・歌學・天文學・算學・易學・醫學・禮法の教師があつた。

(四)享和の改革 明倫堂開校の後、士人向學の風鬱然として起り、文教初めて普及するかの感あつたが、その教養せられるもの、徒に書を讀み文を屬するを能事とし、その弊の赴く所經世濟民の何たるかを解せず、藩治に有用の材となるもの稀であつた。是を以て第十二代前田齊廣はその缺陷のある所を察し、享和三年七月大に諸制を改革し、才能を擇んで教職に就かしめんと宣言し、經武館に於いても亦武術師範人を改むる等のことをなした。此の時明倫堂の職員は、教員として學頭・學監・都講・助教・助教格・講師・講師格を置く制であつたが、學頭・學監は職名のみで、未だ會て之を置かなかつたから、文化三年に廢した。

(五)天保の修補 第十三代前田齊廣襲封の後、士風漸く荒怠し、學事隨うて不振となり、學生の就學する者甚だ減じたから、老臣奥村河内守榮實は、士氣を振作するには、先づ學校を隆盛ならしめねばならぬとの意見を上つた。齊廣も之を嘉し、之を遂行して、

が、規模漸く廣大し、移築せられた學校の敷地をも併合する要あるに至つたので、五年三月十二日再び授業を廢して之を仙石町なる本堂形後方に轉せしめ、七月功を竣へ、爾後廢藩の時に至るまで常にこの所に在つた。